

# 第19号 華山会報

平成19年10月11日  
財団法人華山会

## 人間華山先生に学ぶ

田原市長 鈴木 克 幸



渡辺華山先生については、浅学で断片的な知識しかありませんでした。一年程前から『渡辺華山（別所興一著）』、『異才の改革者渡辺華山（童門冬二著）』、『渡辺華山（ドナルド・キーン著）』、『そして最近『華山渡辺登（小澤耕一著）』を一読し、幕末における近代日本の激動期に、田原藩の藩政改革と世界に眼を向けた先覚者としての偉大さを、今更ながら再認識しているところです。

二十一世紀を迎え、一時代の変動期といえる現代において、華山先生の思想は、真に今日に通じるものがあります。その象徴的なものは「商人八訓」、「八勿の訓戒」に表れていると思います。

「商人八訓」は、経営の心がまえの要諦を示した内容であり、華山先生の観察力、人間に対する洞察力の鋭さに驚かされます。

「八勿の訓戒」は、用人真木重郎兵衛が、藩御用金調達のために大阪商人との談判交渉を行うに当たり、八つの心構えを説いたものですが、市政運営に当たっても肝に銘ずべき内容であります。田原市の将来に向けての課題も山積しておりますが、この「八勿の訓戒」を常に心に留め事に当たらば、道は已すと開かれてくるものと考えております。

余談になりますが、鈴木政二参議院議員さんが内閣官房副長官の頃、激励の八ガキを頂きました。その八ガキの裏面には、「八勿の訓戒」とその解説が印刷されており、国会対策など様々な厳しい場面で、この「八勿の訓戒」を胸に秘め、交渉、折衝をされたのではと拝察したことを思い起しました。

また、市長室に「田原八武ヲ構シ徳ヲ敷キ 天地の間ニ獨立致 掌大の地ヲ百世ニ存候様 御工夫 第一也 何テモ徳ニ之無テ八危シ」の色紙を掲げておりますが、これは白井前市長さんが掲げていたものを譲り受けたものであります。「徳なくしては危し」という結びに華山先生が有徳の士であったことがうかがわれます。

華山先生は、豊富な読書量、多士才々の人々との人的ネットワーク、そして紀行文に見られる様な現地での鋭い観察により、社会の本質、人間の本質をとらえられ、現在に通ずる財産を郷土に残されました。

華山先生の遺徳を、田原市民だけでなく、広く伝えてまいりたいと思っております。

本年七月に、先人の教えを活かしている十三の自治体（東海市（細井平洲）、長野市（佐久間象山）、米沢市（上杉鷹山）など）が集い、童門冬二氏をコーディネーターとした第一回の嚶鳴フォーラムが開催されました。第二回目は来年、中江藤樹ゆかりの滋賀県高島市で開催予定です。是非私も参加し、渡辺華山先生の紹介をしてまいりたいと考えております。



池ノ原公園

いつでも故郷は心の中に

「商人八訓」が取り持つ縁

田原市議会議長

安田幸雄



戦後の復興の中、誰もが貧しかったけれど、心の豊かさだけ

はしっかりと保たれていた時代。そんな時代を経験した団塊の世代の人たちが定年の時期を迎えました。最近、私の周りでも、定年後の話や、孫の話題が多くなり、自分自身がその世代に近くなった気がします。お酒が入ってくると、よく出てくるのが故郷の話題です。懐かしさを込めながら幼いころの話や地域の風景が、これでもかこれでもかというくらい出てきます。その気持ちは、私自身一時地元を離れて東京に出たのでよくわかります。

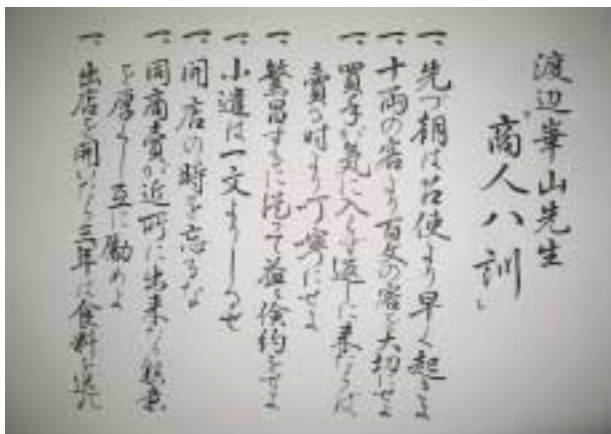
大学を卒業し、北新宿のアパートから毎日、新大久保の駅まで歩いて通勤していたころのことです。会社

からの帰宅途中、蕎麦屋が目に入り、立ち寄ったところ、店の壁に渡辺華山のかなり古いと思われる「商人八訓」が掛けてあるではありませんか。それを見て、主人に問いかけると赤羽根の出身ということがわかりました。その後は話が弾み、彼が地元の中学を出て、住み込みで小僧をしてこの店を開いたことや苦労話、赤羽根にいた時代のことやまで話が進み、奥様も話に加わって「ふるさとの話」に花が咲きました。ご主人は独立してから、地元から自分を頼ってきた若者を雇い入れており、そのうち何人かが独立をしたと言います。今の自分があるのは、この壁に掛けてある「商人八訓」の教えを守ってきたからとお話されたのが耳に残っています。

「商人八訓」の教えは、このように地元から出て商売をされている人は勿論ですが、商業に志を持って励む人の教えとして、全国の経営者にもいまだにその教えは通用しています。また、あまり知られていないで

すが、天保の飢饉の際は、「報民倉」により、餓死者も出さなかった事実は、経営でいえばリスクに対する危機管理の仕組みがすでに出来上がっていたということなのです。まさに華山は、時代の先を見た経営者ではなかったかと思えます。

「故郷は遠きにありて思うもの」という諺のように、故郷を離れた人から見た田原の再発見、そんな話を聞くのが楽しみな毎日になっていきます。



目次

題字「華山会報」華山会理事

小澤耕一

人間華山先生に学ぶ

鈴木克幸

田原市議会議長

安田幸雄

目次

画家渡辺華山の心象

『高士観瀑図』

『外国事情書』

市指定文化財

『漂民聞書』の世界

渡辺華山の

『俳画冊』観賞①

華山の田原行(三)

田原市博物館からご案内

赤羽根文化会館からご案内

渥美郷土資料館からご案内

財団法人華山会からご案内

田原市博物館

## 画家渡辺華山の心象

渡辺華山筆 高士観瀑図

天保九年（一八三八）

絹本墨画淡彩

縦二二六・〇cm 横四三・五cm

田原市博物館蔵

この作品は華山四十六歳の時のも



のである。秋林の中、滝を眺めてい

る高士二人と童子一人がいる。雲煙

がたちこめ、そのはるか上には高樓

が半ば隠れつつ見える。雲煙により

山が途切れているにもかかわらず、

全体の構図は崩れていない。秋深き

渓谷に清らかで涼しげな気配が感じ

取れる画である。この画を賞美する

詩を付す。「山上の浮雲は天に幾重、

秋高く華は王芙蓉に散る、好みて

謝朓の人を驚かす語を携え、酔裡

に落雁峰に登り来る」

華山四十六歳の年は、蚕社の獄の

前年になり、退役願の稿・「駄舌小

記」「駄舌或問」を草して西洋事情

も取り入れる暮らしをしていた。

また、田原藩としては、天保の大

飢饉の時、一名の餓死者も出さず、

幕府より救荒行届きの表彰を受けた

り、沿海防備のことを心し、海岸防

備訓練や砲術の操練を行い、前向き

に取り組んだ時期であった。

このように、充実した生活のなか

で描かれた天保八、九年の作品には、

「孔子像」（田原市博物館蔵）、「溪澗

野雉図」（山形美術館蔵）、「笑顔武

士像稿」（個人蔵）など多くの優れ

た作品がうまれていて、透明感のあ

る心豊かで澄み切った光景のこの作

品には、華山の心境が反映されては

いまいか…と感じさせる。

渡辺崋山

「外国事情書」③

研究会長 渡辺 亘 祥

右八経世文編、海防ノ条ニ相見ヘ候。是ヲ西書ニ照シ考ヘ候得者、澳門八仏郎機ノ全ク領分ニ認有之、又唐土之人ハ、交易船數、昔ハ二十五艘之定額之処、今は衰ヘ、十艘有之ト認有之候得共、洋書ニハ、英吉利亞船八十九艘、亞墨利加船三十艘、弟涅滿彌加ノ船八艘ト有之、其交易ノ品々、并ニ利潤迄委數記シ有之候。右洋人共ハ奸黠故、八幡同様之義仕候力、兎ニ角右之場所、甚不取締之様ニ相見候。必竟八唐土人之心附不申ニ可有之候。又張甄陶力申所ヲ考候ニ、其陽為桀驁不馴。(乃)逆知国家懷柔天覆必不輕加誅戮、因有恃而不恐、非真能不顧死命、而敢悍然無忌也、云々。此語ナドニテモ、手余リ候義モ相見ヘ、また西夷共ノ事情ヲ審ニ不致処モ相見ヘ、又無撓敦大ヲ示シ候処モ相(見)ヘ申候。

以上のことは、『皇朝経世文編』の海防の条に見えております。これを洋書に照合して考えてみると、マカオ全島はポルトガルの領分として記しております。また唐土の人の書いたものには「交易船數は、昔は二十五艘の定めるところ、今は衰えて、十艘にすぎない」とありますが、しかし洋書を見ると「イギリス船八十九艘、アメリカ船三十艘、デーネマルカ(デンマーク)船八艘」とあり、その交易品の品名および利潤まで、詳しく載せてあります。右の西洋人たちは山気のある連中なので、海賊的な密貿易をやっているのであるのか。ともかくマカオは、取締りの行きとどかぬ場所であるようでありませぬ。こうなつたのも、詮じつめれば唐土の人が西洋人のおそろしさを知らなためでもありません。また張甄陶のいうところを考えると、かれはつぎのよつに述べています。「西洋人は、表面はあばれ馬のよつに馴れにくい。というの、かれらは、清朝が懷柔策をとつて、決して軽々しく誅戮を加えるようなことはしない、ということであらからじめ承知しており、これをたのみにおそれないからである。だから心底から死命をかえりみないというのではない。しかもそれでいて、凶暴な振舞いをしてはばからないのは、このような理由によるのであるといつていい。以上言葉の裏からも、清朝では西洋人をもてあましていようすがががわれます。また西洋諸国の事情

に通ぜぬところも、またやむをえず寛大な態度をとつていようすも知られます。

洋書「ヨロシア人北京紀行、又モール陳情表ニモ、此趣ニ認有之候」ヲ考候得者、唐人ノ人ハ他國ノ人ヲバ獸畜ノ様ニ申、悪口ヲ申掛ル也。又魯西亞人「クルウンセン」ト申者、「レサノツト」ニ從ヒ、日本ニ來リシ日記ノ中ニ第十二編ノ日本逗留ノ条、「日本人ノ異國人ヲ取扱フハ、人ニ疵ツクル用意也トハ、兼テ聞シコトナレバ、他邦ノ人ヨリモ能取扱レントハ思ザレドモ、今度我船ハ、大國ノ主ヨリ隣國ヘノ好ミノ為ニ送り候使節ヲ載セ來ル、略。我等長崎ニ來リテハ、日本人ノ阿蘭陀人ヲ扱フヨリハ寛裕ナラント思ヒシニ、自ラ欺カレタル心地ナリ」云々。作去洋人共、他國ヲ論シ候事、先言ガ、リノ如モノニテ、強テ論スルニ足ラズ候。

同様のことは、『ヨロシア人北京紀行』やモール陳情表にも見えております。これらの書物から判断される限りにおいては、唐土の人は外国人を獸畜のよつにみなして、悪口をいうようでありませぬ。またロシア人クルウンセン(クルーゼンシュテルン)という者が、レサノツト(レザノフ)にしたがい、日本に渡來したさいの日記(『奉使日本紀行』)に、第十二編、日本滞在の条、「日本人の外国人にたいする取扱いは、相手を傷つけるような侮辱的なものであることは、かねてからきいていたのでわれわれは他國人よりよい待遇をうけることは期待していなかつた。しかしこのたびのわが船は、大國の君主が隣國への友誼のために派遣した使節を乗せてきたものである。略。われわれは、長崎において、日本人が、オランダ人に与えるよりも、さらに寛容な扱いを与えられるものと思つていたところ、そうではないので、みずから欺かれたという感じを深くした」とあります。もつとも西洋人が他國を非難するのは、まず言いがかりのようなものですから、ことさら問題にする必要はありません。

歐邏巴人ハ表面ハ謙虛禮讓有之候得共、内裏ハ誇大ニ御座候。本体功利ヲ基ト仕候故、礼讓モ礼讓トハ申ガタク、傲慢、ホシイマ、モ傲慢ニ相立不申、唐土ノ人ノ申ゴトク、喜ハ人也、怒レバ獸也、ト申通ニ可有之。乍去、四方ヲ審ニ致候者共故、了簡ハ少々ナラズ(ト)奉存候。

一、右之通、歐邏巴諸國相互ニ自張仕候間、八面皆敵國ニテ、盟會、チカヒヲ以テ合從連衡、モウシヤワセテセメル、仕候趣、殆春秋戰國ノ如クニ御座候。

右故国政ニ憂勤仕、内外 コクナイグハイコク 慎密 トリシマリフセギニ  
致候事、諸州ニ相勝レ申候。

しかるに西洋人は、表面は謙虚で礼儀ヲ心得ているように見えますが、内心は傲慢な連中です。本来西洋人は、功利をもつて行為の基準としているので、礼讓といつても、礼讓のための礼讓とは申しがたく、同様にこれらの傲慢な態度も、傲慢のための傲慢といつたものではありません。唐人の人の言い草ではありませんが、「喜べば人なり、怒れば獣なり」という言葉の通りです。とはいうものの、世界の事情に通じた連中のことですから、了簡はけつして狭くはないと思われま。

一、右のとおり、ヨーロッパ諸国は、互いに勢力の拡大をはかるので、周囲の国がすべて敵国のようなものであります。そこで、それらの国々が同盟を結んで、合従連衡をはかるところは、あたかも中国史でいう、春秋戦国時代をしのばせます。そういうわけで、ヨーロッパ諸国は、それぞれ国政に つとめ、内政・外交ともに慎重で綿密なことは、他の諸国の国々にまさっております。

大抵治体三道有之、一ハ独立ノ国 洋名「ランベパールデ」モナルカールト申、血脈相伝へ、男女ニ限ラズ位ニ即キ、其内、一君、権ヲ専ニ仕候国、王家ト政府ト権ヲ合シ候国有之候、一ハ守盟ノ国「ベバルデーモナルカールト」申、先八附備ノ如キモノ、共治国「ゲメーネペストゲシンド」ト申、賢才豪傑ヲ推テ、君長ト致、一國ヲ公ニ仕候制度。右之國々ヲ帝國 ケイスル、王国 コーニング、上公国 アールツヘルトゲン、大公国 コロートヘルトゲン、侯国 ヘルトゲン ナド称シ、其国ニ位階有之、頗名教モ行ハレ申候。宗門八区々ニ候得共、歸スル所、三宗ニ不過候。一ハヨードン宗 其元祖ハ亜弗利加ヨ「リ」起リ、最古キ宗門ニ御座候、一ハキリステン宗 即、邪宗ノ派ニ御座候、一ハ「マホメット宗」 唐土ニテ回タト申候ノ宗派由。欧邏巴ノ内、杜爾格國計行レ申候。

政体は、およそ三つに分けられます。一つは独立の国「洋名「ランベパールデ」モナルカール」(専制君主国)と申し、王位は世襲で、男女に限らず位につきます。そのうちには、君主が国権を占有する国と、君主と政府が国権を共有する国とがあります。「一つは守盟の国「ベバルデーモナルカール」(立憲君主国)と申し、いわば従属国のようなものであります」「一つは共和国「ゲメーネペストゲシンド」(共和国)と申し、賢才豪傑を推して君長と

し、一國を公共の所有とする制度です。これらの国々を帝國「ケイスル」(皇帝)、「王国」(コーニング(國王))、「上公国」アールツヘルトゲン(上公爵)、大公国「コロートヘルトゲン」(大公爵)、侯国「ヘルトゲン」(侯爵)などと称し、それらの間に位階の差があり、君臣の分がすこぶる明瞭です。宗門はいろいろですが、せんじ詰めれば、三宗にすぎません。一つはヨードン宗(ユダヤ教)「その祖はアフリカより起り、最も古い宗門です」、一つはキリシテン宗(キリスト教)「これはわが国でいう邪教のことです」、いま一つはマホメット宗(イスラム教)「唐土で「ファイイ」とよぶのがこの宗派のよし。ヨーロッパ諸国の中では、トルコだけで行われています」。

其政事ハ養才造士ヲ先ニ仕、其次第八、第一教道「ゴットゲレルヘード、第二政道「レクツゲレルヘード、第三医学「ゲネースキユンデ、第四物理学「ウエースベゲールデ、右ヲ四学ト称シ申候 四学ハ明德・治民・撰生・格智。次ヲ芸術「キユンステン」、心智四体ニ応ズルノ学、画学・舞樂ノ類、次ニ手職「ハンドウエルケン」、一編ノ智ヲ以テ、百上ニ趨クモノ。以上、皆学校學場有之、学校ハ大ニ「ユニナルシテイテン」ト名ケ、教・政・医・物理ノ四科ヲ分チ、教申候。此学ハ諸学ヲ經テ撰生セラレ候テ、入学致候事ニ候得者、皆英俊ノ者計相集リ候ヨシ。和蘭小國ナレドモ、学徒数千人有之、又一國中、大ニ四ヶ所御座候由。此四学ノ内モ専門教科有之、大抵教学ハ三科、政学モ又三科、医学ニ科、物理学五科、又此科ノ中ニモ次第有之候由。此四学ノ備用ニ芸術・工職ノ類モ場ヲ設フケ有之候由、

その政治は、「養才造士」、すなわち教育をとくに重視しております。その教育内容は、第一に教道「ゴットゲレルヘード(神学)」、第二に政道「レクツゲレルヘード(法学)」、第三に医学「ゲネースキユンデ(医学)」、第四に物理学「ウエースベゲールデ(哲学)」の四つで、以上を総称して四学と申します。「四学とは、唐土の古典に見える、明德・治民・撰生・格智にあたります」。これらについて芸術「キユンステン」(技芸)といい、心智と肉体の両方にかかわる学で、画学・舞樂の類「ハンドウエルケン」(手工業)といい、わずかな知力をもつてさまざまな技術生産に従事するもの「があり、以上のそれぞれに教育施設が備わっております。学校は、大ニ「ユニナルシテイテン」(大学)と名づけ、教・政・医・物理の四科に分けて、教育してあります。ここには、下級諸学校の課程を経たのち、選抜されて入学することになっているので、いずれも英才の者ばかりが集まっている、ということなのです。たとえばオランダは、小国ながら、学徒の数が数千人

もあり、また国内には大学校が四ヶ所に設けられているよし。以上の四学科のそれぞれのうちに、専門学科が数科ふくまれ、およそ教学(神学)は三科、政学(法学)も三科、医学二科、物理学(哲学)は五科に分かれ、それらの各科目の間に学ぶ順序があるよし。この四学科の補助学科として、芸術・工学の類も備わっているといふことです。

羅甸学「コルレギーン」ト申、「ラテン」「ギリシヤ」ト申古語及ビ諸国ノ語ヲ学ビ候。其学凡六科有之由、小学校「ヒュルゲル」、又「コストスコーレン」、道教ノ初学、詩文・音学・算術ノ初学、地理歴史ノ学、自然窮理学、又弘郎察・英吉利亜・独逸・意大利亜等ノ語、又志ニヨリ音律・画学等ヲ教ヘ候由。此学校ハ郷学故、所々ニ有之候、幼学院「ケレーネキンデレ」スコーレン、書学・読書ヲ始トシテ、通俗礼法一切ノ幼学、備リ不申八無之、義学「マートシカッヘイ」、是又郷学ニ御座候。近來州間ノ間、専ラ行レ候テ、学則甚能相備リ、古ノ幼学法再興仕候由。右成才成徳ノ後、政府ニ入、教院ニ入、学師ト相成、学ビ得候所ヲ施行仕候。右之外、傭劣ノモノハ力役ノ業ヲ教ヘ、無志ノ者ハ、商估「コープハンデル」、芸僧「ハブリーケン」、商ハ諸物ノ有無ヲ通、此芸僧ト申ハ、諸芸ノ有無ヲ通シ候商人ニ御座候、商会「タライーゲン」、コレハ又商人ノ有無ヲ通シ候モノニシテ、此方之市僧ノ類ニ御座候。二相成、皆商館有之候テ、商法ヲ定、官許ヲ得申候。無告之者ハ貧子院ニ入、病院ニ入、国ニヨリ女学院ヲ別ニ設ケ申候。

ラテン学校(中等学校)「コルレギーン」ともいひ、ここでは「ラテン」「ギリシヤ」(ギリシヤ語)という古典語、および諸外国語を学びます。学科目はおおよそ六科あるといふことです。小学校「ヒュルゲル(スコーレン)」「市民のための初等学校」、あるいは「コストスコーレン(寄宿学校)がこれにあたり、道徳の初歩、詩文・発音・算術の初歩、地理・歴史の学、自然科学、またフランス、イギリス、ドイツ、イタリア等の諸外国語、そのほか希望によつては、音楽・画学等をも教えるといふことです。この学校は郷学校なので、各地方にあります。幼学院「ケレーネキンデレ」スコーレン(幼児学校)とよばれ、読み書きをはじめとして、通俗の礼儀作法など、幼児に必要なしつけや教育のいっさいが、ここで行われます。義学「マートシカッヘイ(私立学校)といつて、これまた郷学校です。近來地方においてもつぱら行われ、学則がはなはだ備わり、古代の幼学法を再興したもの、といふことです。これらの学校教育を終えたのち、ある者は官吏として政府に仕え、ある者は教会に入つて聖職者となり、またある者は学校の教師となり、修得

した知識を実際に役立てます。このほか知能の劣つた者には職人の技術を教え、教化や政治に志をもたぬ者は商人(コープハンデル)・職業紹介人・仲買人となり、みなそれぞれ商館があつて、商法を定め、官許を得て、商売に従事しております。窮民は貧子院に入り、あるいは病院に入り、また国によつては別に女学院を設けております。

切又一種奇ナル風ノ有之ハ、リットルト申義会「職方外記ニ義会ト有之ハ、即コレニテ候」有リテ、一國ノ大事ヲ建議仕、国ト死生存亡ヲ同シク仕候使者ノ会ニ御座候。コレニハ貴賤之別ナク、会ノ法ニ從ヒ候由。私ニ会ニ入候得共、許シ八國王ヨリ賜リ候。長崎へ参り候甲比丹ニモ、往々有之由。教主ト申ハ、此方ノ儒道ヲ尊奉仕候通、邪教ニ候得共、別ニ天道無之間、貴キコト八國王ト位ヲ同シク仕、唐人ノ人ノ「其國善政王アリ、治世王アリ、法王ノ勢、民主ノ上ニ有リ」ト申候如ク候得共、国ニヨリ左迄ノ事ニモ無之由。法王ノ与リ候義ハ、上ニ國王ヨリ、下モ庶民ニ至リ候迄、人倫五常之様ナルコトヲ教ヘ、戒ヲ授ケ、又君ノ君タル所以ヲ失シ候得バ、コレヲ正シ、民ノ人倫ニ背キ候事ハ曉諭反復仕、若悟ラザルモノ有之候得バ、教主ノ恥ト仕候。其為ス所ハ此方一向宗ノ如ク仕候。又婚禮・喪祭等ヲ司リ、又死罪ハ官府ヨリ決斷ヲ求メ候由。

さてまた一種の不思議な風習と思われるのは、「リットル(騎士団)といふ義侠者の会のことです。『職方外紀』に出でくる「義会」とは、これのことです。一國ノ大事を建議し、死生存亡を同じくすることを盟つた者たちの集団であります。この集団内部においては、身分的差別というものがない、もつぱら集団の掟にしたがう、という仕組みになつてゐるよし。個人の資格で入会しますが、あらかじめ國王の許可が必要です。長崎に赴任するオランダ商館長の中にも、その会員が往々まじつてゐる、というように聞いております。

西洋諸国には、國王のほかに、教主(司教)といふ者がおります。西洋では、わが國人が儒教を尊奉するように、邪教が尊奉されてゐますが、ほかに大道といふべきものがないため、教化をつかさどる教主が國王と対等の地位を占めており、その実状は、唐土の人が「西洋諸国には善政王と治世王とがあり、前者の勢いが後者をしのぐ」と指摘してゐるとおりであります。しかし、国によつては、それほどでもないといふことです。教主が関与する事柄は、上は國王より下は庶民にいたるまで、人倫五常の道を教え、戒律を授けることと、もし國王が君主の道にはずれるような行為を犯したばあひ、これを正



天保十年、江戸湾防備の目的から備場巡見の副使を命ぜられ、その復命書の提出にあたって華山が「外国事情書」の執筆を依頼した江川英竜の、現存する江川邸の北西からの全景

(財団法人江川文庫提供)

し、また人民が人倫の道にそむくようなばあい、これをくりかえし教えみちびき、それでもなおかつ悔い改めぬばあいは、それをもって教主の恥とします。その教えみちびく仕方は、わが国の一向宗と似ております。また婚礼・喪祭などをつかさどり、死罪の者があれば、政府が教主に決断をもとめる、ということですよ。

官府八内治外交ノ努力ヲ精勤仕候事、学校ノ学士ト相変リ候義無之、大功大勲ヲ立候モノハ、万世旌表仕、其像ヲ鑄、又表ヲ立候テ祭リヲ致、学士ノ著書八名ヲ以テ題ト仕、奇工ノモノハ其名ヲ以テ器ニ銘シ申候。  
 武術ハ武術学場有之、無事ノ時ハ毎日操練仕、其外夜成ノ勤番、王宮内外ノ衛護、海岸防禦等、申サバ此方火消ノ如ク、除キ切ニ御座候。弘郎察国ハ「ボナバルテ」敗亡ノ後、国郡滅シ、軍官モ寡少ニ相成候得共、海軍ノ船数大小二百十九艘、内六十艘ハ大砲二千八百七十坐ヲ備へ、兵士二万五千九百人、常二軍装ヲ致、海陸警衛仕、其余ノ船八他二用ヒ不申、空船二仕、不虞ニ相備候由、コレヲ以テ、西洋諸國ノ風、推テ相分リ可申候。

政府の官吏が内治・外交に精勤することは、大学の教官が教育・研究に専念するのかわるところがありません。大功・大勲をたてた者にたいしては、永世にわたってその功をほめたたえ、銅像をつくり、石碑を建てて、祭りをします。学者の著書は、その名を題名とし、発明家のばあいは、発明した機械にその名をきざみ、名を永久に伝えるということになっております。  
 軍事にかんしては、軍事学校が設けられ、平時は毎日ここで訓練を行い、そのほか夜衛や王宮内外の警備、海岸防禦などの勤務につくことになっております。これらの軍備につく者は、わが国でいうと、定火消とおなじで、常備ということですよ。一例をあげれば、フランスは、ナポレオン戦争でやぶれたのち、領土が削られ、兵数も少なくなりましたが、それでも軍艦の艦数、大小あわせて二九 艘、そのうち六十艘は大砲二八七 坐を備え、常備兵は二万五一九 人、戦時装備をして海陸の警備にあたり、その余の艦船は他用にもちいず、空船のまま保存し、万一のばあいに備えている、ということですよ。これをもって西洋諸國の風習が推し量られる、と思えます。

つづく

市指定文化財

『漂民聞書』の世界

田原市博物館

学芸員

天野敏規

はじめに

『漂民聞書』は、幕末の鎖国から開国政策の狭間のなかで発生した地元船（永久丸）のアメリカなどへの漂流の様子が詳しく書かれた古文書です。その完成は、安政三年（一八五六）。当時の田原藩は、渡辺華山の頃より外国事情とりわけ海防には強い関心をいだいており、積極的に情報を収集して、幕末激動の時代に対応しようとしていたのです。

『漂民聞書』とは

三河国渥美郡江比間村伊藤与市持船の廻船であった永久丸の漂流の様子について最も詳細に記録された漂流記です。乗組員は、船主より船を任せられた沖船頭の岩吉（六六歳）その弟の水主善吉（四歳）ともに江比間村（旗本諏訪氏領）出身、水主勇次郎（二二歳）芦村（田原藩三宅氏領）水主作蔵（二二歳）若見村（田原藩三宅氏領）出身の四人でした。なお、この年齢と支配領の違いが、後の二組の帰国者の運命を大きく左右することになるのです。



田原市指定文化財『漂民聞書』

『漂民聞書』は、田原藩主三宅康保が安政二年（一八五五）に藩士の村上範致・萱生景福・稻熊元長の三人に命じ、田原に帰った漂流民作蔵（一部勇次郎）から漂流の顛末を書き取らせられたものです。全二巻から構成され、美濃本五冊にまとめられています。その内容は、全二巻のうち、巻一から巻八（第一、二冊）までが本文編（漂流記）、巻九から巻一二（第三、四、五冊）は、それぞれのテーマごとに本文編を補足または外国事情などを知るための資料となっています。

現在、市の有形文化財に指定され、渥美郷土資料館蔵となっている『漂民聞書』には、田原藩校成章館の蔵書印が押され、恐らくは藩主への献上本であった可能性が高いと考えられます。

『漂民聞書』の挿絵

『漂民聞書』には、本文中の所々に挿絵が入れられ、巻一一と一二（第五冊）には諸国の物産や衣服・器械などが図示されています。田原藩に残

された藩の日記、安政二年『諸事留』によれば、その挿絵の作者は、巻一二の「衣服器械図」のみ、家督を相続する前の渡辺小華が江戸の藩邸に持ち込まれた原資料を見ながら描いたということがわかります。しかしながら、それ以外のものについては、誰が描いたか確実な史料が不明でよくわかりません。いずれにしても、この挿絵だけを見ても海外の風景や人物、風俗などが彩色を加え、きれいに描かれているので当時の海外の様子を知ることができると大変に興味深いものとなっています。

永久丸漂流記

永久丸の漂流事件とその乗組員の帰国についての概要は、紙面の都合により、次号以降にゆずることとしますが、すでに田原市博物館研究紀要第一号「渥美郷土資料館所蔵『漂民聞書』について 永久丸の漂流とその漂流者たち 二 六年、第二号「田原市指定文化財『漂民聞書』所収の挿絵について」二 七年で紹介されています。



「衣服器械図」(部分)

(続)





はじめに

『俳画冊』は、田原市博物館所蔵で、二冊からなる華山の俳画集である。紙本淡彩で、二十四幀からなり、大きさは縦二五・七cm、横三七・二cm。



『俳画冊』表紙

成立の年代は不明であるが、『渡邊華山先生錦心図譜』では晩年期の作とされ、田原市博物館の図録『館蔵名品選』第2集(平成十七年一月一日発行)では「落款もなく、年代を特定するのが困難だが、天保年間と考えたい。」とされている。その『俳画冊』の内容構成は、四季の移り変わりに従って、春夏秋冬の順に、二年分が十二幀ずつにわかれており、前半は春三枚、夏二枚、秋三枚、冬四枚、後半も春三枚、夏二枚、秋三枚、冬四枚の俳画が描かれ、それに一句ずつの俳句が添えられている。その俳句は、いずれも

華山の自作の俳句と思われる。つまり、この『俳画冊』は、句画ともに華山自作の作品である。

既に周知のとおり、華山は二十代の若い頃から俳句に親しみ、有名な「身よや春大地も亨す地蟲さへ」の俳句の他にも『華山先生謾録』などにも多くの作品がある。過日私が確認しただけでも七十五句があった。

こうした華山の俳句への関心の一つには、華山を取り巻く生活環境と無縁ではなかったように思われる。それは、華山の父定通(号 巴州)が俳句をたしなみ、遠縁に当たる俳人採茶庵二世平山梅人(田原藩士)のもとへ作品を送り、梅人編集の『寛政二年歳旦帖』には三句が載っているところから見ても、華山が幼少の頃より、こうした父のたしなみの影響を間接的にも受けなかつたとは思えない。父の俳諧の師であった梅人の兄は、平山文鏡という人で、華山が九才の頃まで絵の指導を受けた先生である。そして、梅人との直接接していたという証拠はないが、そうした関係から考えても、華山がこの俳人である梅人と接していたという事は十分に考えられる。そうした環境から見ても、華山が俳句に関心をもつには十分な土壌が醸成されていたとみて不思議はない。

今一つには、華山の交友関係が大きく影響していることを否定出来ない。若い頃から俳諧師太白

堂一門の五世加藤菜石や六世江口孤月から二十年(文政初年から天保八年まで)にもわたって、歳旦句集『桃家春帖』の俳画を頼まれて、その木版刷りの俳画の元を描いている。その他、俳句をたしなむ高木梧庵や鈴木三岳なども交流があった。

こうした醸成された俳句への関心と華山の本業である絵画との結合の結果生まれてきたのが、華山俳画であり、この『俳画冊』は、まさにその代表作の一つといつていい。

よく華山俳画の代表作として紙面を飾るのは「朝顔八下手のかくさへあは禮奈裡」であるが、確かにこの朝顔の図には、華山の俳画についての理論の具現化したものがあり、その単純化、省略化した素朴な朝顔の見事さには驚嘆すべきものがある。しかし、私自身の好みをいえば、この『俳画冊』の一連の俳画のほつが好きである。なぜならば、この『俳画冊』



俳画「朝顔は」

は、どれも句画ともに華山自作の作品であるが、朝顔の俳画は、俳句が自作ではないからである。多くの人は華山の自作と考えているようだが、実はこの句は松尾芭蕉のものである。芭蕉の貞享四年

(一六八七)の秋の作である。華山はその句の俳意をくみ取って一枚の朝顔の図に仕立てたのである。私は、その点が残念なのである。

ついでに書き加えるならば、華山にはこの「下手にかく」を詠み込んだもう一枚の俳画がある。へちまを描いた「下手のかく絵こそまことの糸瓜かな」という俳句の記された「糸瓜の図」がそれである。この絵の俳句は、多分に芭蕉の朝顔の句に倣ったところがあるが、確かに華山の作である。それに、この俳画の場合は、俳句よりも絵が素晴らしい。まさに糸瓜の絶品である。



糸瓜俳画之図

この絵は、画面の左上から長い糸瓜が垂れており、その根元あたりに描かれた数枚の葉があることよって、糸瓜を支える棚があることが予測される。そして、画面の中央あたりから太い蔓が出て、その先端が中央の葉に及び、濃淡巧みに描かれた葉から更に画面の右へ向かって蔓が伸びている。葉は、いずれも水をたっぷりと含ませた

筆を使った、たらしこみの技法で描かれており、無造作に描かれているように見えながらも、糸瓜の形といい、葉の形や濃淡の様子といい、にじみな趣と風韻を感じさせて厭きることがない。それ故、私はこの「糸瓜の図」をこそ、華山俳画の代表作として顕彰されてしかるべきではないかと思っている。

これから鑑賞する『俳画冊』は、そうした華山の代表作と比較しても決して遜色のない作品である。私は、この『俳画冊』も又今後俳画としてもっと高く評価されてしかるべきではないかと思う。

鑑賞を始めるに当たって、余計な私見もはさんでしまったが、以下『俳画冊』のそれぞれについて、鑑賞をすすめてみたい。

### 『俳画冊』鑑賞

#### 一、飛込むで月日落ちつく花の春

『俳画冊』の最初に出てくる作品である。俳句の季語は、「花の春」で、新年の句である。この「飛込むで」は読むときは「で」と「こむ」。「飛込むで」である。句の意味は、一見して何を詠んだ

ものか分かりにくいところがあるが、これは、句に添えてある絵を見ると分かる。この絵では、三



行書きされたこの句の左側に正月の鏡餅飾りが描かれ、その左隅にちよろりと走り出た鼠が描かれている。そう思つてよく見ると、鏡餅の上にも一匹横向きに、尾を垂らして鏡餅にかじりついている鼠

も見える。このことから、句だけではよく分からなかった「飛込むで」の主体が「鼠」であったことがわかる。そして、この画によってこの一句の意味もわかってくる。つまり、句の意味も「鼠」が物陰に飛び込んで、いつしか月日ももう花の春だと言つことに落ち着いたというほどの意味である。このことから、この一句は、軽い挨拶程度の句といつていいものである。

もう一度よくこの絵をみてみよう。ここに描かれた絵は、墨の線描を主としたクロッキーのようなもので、色は、鏡餅を載せる台の薄い茶色と裏白と思われる葉の薄い青がさつと添えられている程度である。それでいて、この絵は、墨の線が実に軽やかに物の要所を捉えていて、伸びやか

に屈託がなく実に見事である。特に、二匹の鼠に見られる華山の筆致は、まさに省略の妙といえることができる。

## 二、鶯の身はかくれ居てなきにけり

『俳画冊』では画面の左側に梅の木の枝が幹から分かれて二枝描かれている。一枝は上方に、他の一枝は中央に向かって斜めに伸びた幹の先に少し。それだけの簡素な俳画である。



句の内容は、実に単純明快。目に見えない鶯がどこかに隠れていて鳴いたことだ、という意味で、平凡な声の鶯を詠んだ句であるが、物の姿を目で捉えることを業とする

画家の華山が、このような形で、見えない声の鶯にも心を寄せて、句にしているところが面白い。

華山は日常、ほとんどメモ魔といってもいいくらいに、見たもの

聞いたことを画にし、文字に書いて遺すことを心がけた。それらの中には、実に丁寧に精密に写し取ったものもあれば、全くのメモ程度に荒削りに

なぐり書きしたようなものもある。しかし、華山の画業全体、いや華山という人間像の全体から、その一つ一つの遺されたものを見直してみると、それらの無駄や落書きに等しいものが、実は決してそうではなく、華山の傑作とされるいくつかの作品を生み出すための基礎をなしていることを知るのである。

華山にとって、日常の中で絶え間なく繰り返し引かれ、描かれ続けるさまざまな線や点は、傑作といわれる作品のもつ鋭く揺るぎたいあの線の美しさや見事さを生みだすためのものであったのだと思うと、それら何気なく描かれたものにまで限りないかけがえのなさが見えてくるから不思議である。

この目に見えない鶯は華山にとっては、確かに写し取ることの出来ないものである。しかし、その声によって鶯は確かに存在すると知覚される。それを描こうとすれば、ものの形ではなく鳴き声から想像するしかない。

見えないものの姿さえもこのようにして、捉えておこうとする華山の精神の自由さをここにはかいま見ることができるよう気がする。

## 三、留守とおもへばくさめする五月あめ

「五月あめ」が季語、夏、梅雨時のじめじめする空気の漂つ中、人を訪い、案内を乞うても返事が無い。おかしいな、誰もいないのかな、留守かしらん、などと思つて帰ろうとすると、奥でくしやみの音がした。やっぱり誰かがいたのだ。



この句は、梅雨時のそんな情景を詠んだものであるが、七五五の破格が却って効果的にはたらいしているし、川柳的な味わいもあつておもしろい。

『俳画冊』では、散らし書きされたこの句の右側に二人の人物が描かれている。一人は、着物の裾をからげて、番傘を斜めにさしている人。もう一人は、紙子のようなものを頭上に広げて前屈みになって雨を避けている人である。

恐らく雨の中を訪問した人の姿を描いたのであるが、この二人果たして訪問先の人へ会つて帰つたのか、会えないで帰つたのか、そんなことまでもあれこれと想像させてくれるところが面白い。

俳画の匂い付けの妙を味わうべきである。

研究会員 山田哲夫

## 華山の田原行（三）

一月二十七日

華山は、この日も早出をしようと思っ  
たが、宿の主人がねぼけて、興津宿を出たのが午  
前六時過ぎになってしまいました。

その後訪れた江尻宿では、最近始まった海苔の  
養殖について記してあります。海苔作りは、江戸  
の大森から海苔を作っている人が来て、三保の海  
で作り方を教えたということです。作り方は、浅  
草の作り方と同じで、製法は会得しているよう  
です。

華山は早速買って味見をしますが、味は悪いと  
評価しています。海苔の多くは甲州に売っている  
とのこと。また、五、六十年来、砂糖が作ら  
れていることも記されています。

府中宿で広蓋を二面買い、安倍川のほとりで昼  
食をとります。その後、藤枝宿で佐束紙を買い、  
この日は、島田宿にとまります。

一月二十八日

この日は、午前四時ころ出立しようと思っ  
ましたが、主人がねぼけていたので日が高く昇っ  
てから出立しました。

二日続けて出立が遅れています。それが宿の主  
人のせいになっていますが、朝食の準備が整わな



島田 三十三次東海道版永保堂

かったからでしょうか。旅人は、自分で目覚め早  
立ちをするので、ひよっとしたら、急ぐ旅でなか  
ったから、華山が旅の疲れから寝過ぎしたのかも  
しれません。

江戸時代、大きな川には、軍備上の理由から、  
家康により、橋を架けることが禁じられていまし  
た。大井川や安倍川がその代表です。大井川につ  
いては、渡し舟も禁止されていました。そのため、  
川を渡るには、川会所で川札を買い、川越人足を  
雇うということが行われていました。川札の値段  
は、川の深さと幅で決まります。武家については  
客に渡し賃を決めさせて払わせる問屋渡しが原則  
だったようです。

華山は、大井川を渡るのに、渡し賃として六十  
四文払ったとあります。

渡し賃について、「平成東海道五十三次膝比べ」  
(<http://members.jcom.home.ne.jp/nishiyak/tokaido>.)  
の「島田」の項を調べると、

水深が股まで	四十八文
下帯の下	五十二文
下帯の上	六十八文
乳下まで	七十八文
脇の下まで	九十四文

とあります（一文は三十円）。創作ですが、弥次  
喜多は二人で、八百文請求されています。



全樂堂日録

なお、華山三回目目の田原行の江戸への帰途を綴った文政十年（一八二七）の『帰都日録』には、

「大井川 から尻 八十九文

歩渡 百十八文」

「嶋田

百三十六文 からじり

× 寺々百五十九文

大井川

百十八文 三六へかし」

という記述があります。

「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川」を無事越えた華山は、その後、金谷、日坂の山越えは書くことがなく、ただ水あめを買っただけと記し、以下二川までのすべての宿場町の特産品や様子を記していきます。

掛川：葛布・しとろ焼きの陶器

袋井：花筵、北の吉川で佐束紙と同種類の紙

見附：や紙を買つ、やは、遠州の西にある

地名

浜松については、この地で雇った駕籠かきから聞いた水野忠邦の藩政について詳しく述べています。

「君侯甚刻、近頃鎌、菜刀、油の類を御領内人別に頒ち、其価を期して有司取立つ。甚刻政なるよし、人民の愁なりとぞ。其価も又下ならざれば、殊さらに望を失えるとぞ。租も又定額なれど、凶歳には毛見を願ふことなれど、有司共の来り饗養せるに苦しみ、凶歳にも困難を甘んじ願はずとぞ」

水野忠邦は、文化十四年（一八一七）浜松に転封となり、天保五年（一八三四）本丸老中となり、天保十二年から本格的に天保の改革を始めます。華山が訪れたのは、天保四年ですから、忠邦が老中になる前のことです。

この日は、川口屋という脇本陣に泊まると記し



保永堂版東海道五十三次 浜松

てあります。しかし、天保十四年の『東海道宿村大概帳』によると、浜松には脇本陣がないので、川口屋は、本陣（現・川口本陣跡）の誤りではないでしょうか。（続）

研究会員 柴田雅芳

## 田原市博物館からご案内

三河・遠州に華椿系の江戸文人画があふれる。

重要文化財、重要美術品を含む約140点を公開

### 秋の企画展

没後120年

## 「渡辺小華展―華椿系の百花と水墨」

会期/十月六日(土)～十一月十一日(日)

開館時間/午前九時～午後五時

(入館は午後四時三十分まで)

休館日/毎月曜日、ただし、十月八日は祝日のため、開館し、十月九日は休館します。

観覧料/一般 六〇〇円(四八〇円)

( ) 内は二十名以上の団体の料金

中学生以下無料

主催/田原市博物館・財団法人華山会・中日新聞社

渡辺小華(一八三五―一八八七)は、渡辺華山の二男として江戸麹町(現在の東京都千代田区麹町)田原藩邸に生まれました。華山が田原池ノ原の地で亡くなった時にはわずか七歳でした。その後、弘化四年(一八四七)十三歳の小華は田原から江戸に出て、椿椿山の画塾琢華堂に入門し、椿山の指導により、花鳥画の技法を習得し



涉園九友図(明治7年・豊橋市美術館蔵)

ます。嘉永四年

(一八五二)、江

戸田原藩邸で世

子三宅康寧のお

伽役として絵画

の相手を命じら

れました。嘉永

七年、絵の師椿

山が亡くなると、

独学で絵を勉強

します。安政三年(一八

五六)、江戸在勤の

長兄立が二十五歳

で亡くなったため

、二十二歳の小華

は渡辺家の家督を

相続し、三十歳で

田原藩の家老職、

廃藩後は参事の要

職を勤めました。

明治維新後、田

原藩務が一段落す

ると、田原・豊橋

で画家としての地

歩を築き上げまし

た。第一回国絵画

共進会(同十五年)

に出品受賞し、

明治十五年(一八

八二)上京し、中

央画壇での地位を

確立していきます

ます。花鳥画に

は、独自の世界を

築き、宮内庁(明



渡辺華山 牡丹図

(重要美術品・天保12年・田原市博物館蔵)



雲龍図(明治3年・平野美術館蔵)

歳で病没します。

本年は小華没後、

一二〇年にあたり

、今回の展覧会で

は、小華作品とし

て琢華堂入門中の

嘉永二年の作品か

ら晩年までの作品

約一〇〇点と、渡

辺華山から椿椿山

に継承される花鳥

画家として華山の

末弟渡辺如山(一

ます。

なお、会期中には

作品の展示替(後

期10月23日)が

あります。

展示内容/渡辺小

華 雲龍図(明治3

年・平野美術館

蔵)・牡丹図(明

治6年・豊川閣寺

寶館蔵)・涉園九

友図(明治7年・

豊橋市美術館蔵)

・煙草棉花写生

図(田原市博物

館蔵)・牡丹に孔

雀図(明治12年

頃・西園寺蔵)・

渡辺小華印類(

田原市文・田原

市博物館蔵)ほか

渡辺華山 牡丹

図(重要美術品・

田原市博物館蔵)

・自決脇差(重要

文化財・田原市

博物館蔵)ほか

椿 椿山 渡辺華

山像(嘉永6年・

重要文化財・田

原市博物館蔵)ほか

渡辺如山 花

卉図屏風(天保

7年・豊橋市美術

博物館蔵)ほか

### 〔催しもの案内〕

記念講演会 演題「近世絵画から近代日本画へ」文人画の流れを中心に」(入場無料)

講師・奈良県立美術館副館長 吉田俊英氏

10月11日(木)午後1時30分から 華山会館

### 展示解説

10月14日(日)・11月4日(日)午前11時

参加希望の方は観覧料が必要になります。

今回の企画展の図録を販売しております。この機会にぜひお買い求めください。

A4版、カラー・一色 無線綴じ183ページ

価格2,000円(税込)

赤羽根文化会館 からご案内  
渥美郷土資料館

特別展

愛知県美術館 平成一九年度 移動美術館

名画への旅―近代から現代へ―

赤羽根文化会館 二〇世紀の美術と人と風景  
渥美郷土資料館 愛知ゆかりの作家たち

平成一九年十月二十日(土)～十一月十八日(日)

美術館活動の主な役割に、優れた美術作品の系統的な収集があります。愛知県美術館では、二〇世紀の美術を柱として作品を収集し、館内で展示公開していますが、さらに多くの皆さんに実作品を鑑賞いただくため、毎年移動美術館を行っています。

今回の移動美術館では、愛知県美術館の貴重なコレクションの中、明治期から今日に至る日本の洋画を中心に、近年寄贈を受けた木村定三コレクションの作品も展示します。岸田劉生、黒田清輝、安井曾太郎、鬼頭鍋三郎、杉本健吉、熊谷守一などの作品が展示されます。

なお、初開催となる赤羽根文化会館展示室では、人と風景をテーマに二〇世紀美術の流れに沿った作品を、渥美郷土資料館では、愛知にゆかりのある作家たちの作品を中心に展示します。

また、展覧会にあわせて記念講演会や会場でのギャラリートークも開催し、多彩な二〇世紀美術の特質と魅力を紹介します。

主催：愛知県美術館（財）愛知県文化振興事業団  
田原市、田原市教育委員会

展覧会場：渥美郷土資料館企画展示室、赤羽根文化会館展示室

開館時間：午前九時～午後五時（入館は午後四時三十分まで）

初日は開会式のため午前十一時から一般公開となります。

休館日：月曜日休館

観覧料：無料

展示内容

赤羽根文化会館（二〇世紀の美術と人と風景）

黒田清輝「花と猫」一九〇六年、海老原喜之助「雪山と樵」一九三三年、桂ゆき「人と魚」一九五四年、荻須高德「サンドニ」一九六四年、エドワード・ジョーン・ポインター「世界の若かりし頃」一八九一年ほか二十七点



黒田清輝 「花と猫」 1906年



桂ゆき 「人と魚」 1954年

渥美郷土資料館（愛知ゆかりの作家たち）

岸田劉生「斉藤与里氏像」一九二三年、三岸節子「魚とインカのつば」一九五二年、鬼頭鍋三郎「マドモア

ゼルム」一九五四年、熊谷守一「白猫」（木村定三コレクション）一九六二年、戸張孤雁「燐く嫉妬」一九二四年ほか二十九点



鬼頭鍋三郎 「マドモアゼルム」 1954年



熊谷守一 「白猫」（木村定三コレクション） 1962年

【催しものご案内】

記念講演会／十月二十日(土) 午前十一時～

演題「美術のためのしめ」

講師：愛知県美術館館長 牧野研一郎氏

会場：渥美文化会館大会議室【入場無料】申込不要

ギャラリートーク

十月二十八日(日) 午後二時三十分～ 渥美郷土資料館

十一月四日(日) 午後一時三十分～ 赤羽根文化会館

【いずれも入場無料】申込不要

\*愛知県美術館学芸員が会場にて展示作品の解説をします。

愛知県美術館

移動美術館講座／十一月十日(土) 午後一時三十分～

演題「愛知の美術」

講師：愛知県美術館副館長 木本文平氏

会場：赤羽根文化会館視聴覚室【入場無料】

定員：四十名（田原市博物館に事前にお申し込みください）

\*開催期間中、渥美郷土資料館で愛知県美術館のオリジナルグッズ（図録・ポストカードなど）を販売します。

財団法人華山会  
田原市博物館 から  
ご案内

企画展のご案内

十月六日～十一月十一日

秋の企画展「没後120年渡辺小  
華展 華椿系の百花と水墨」  
(企画・特別展示室)

平常展のご案内

十一月十六日～十二月二十七日

渡辺華山と福田半斎(特別展示室)



渡辺華山筆 威振八荒図

冬を迎えて (企画展示室1)  
吉胡貝塚公園オープン記念 渥美半島  
の巨塚展 (企画展示室2)

一月五日～二月十七日

華椿系の画家たち 近代への流れ  
(特別展示室)  
田原の美術「寄贈・寄託品を中心  
に (企画展示室)

二月二十一日～三月三〇日

谷文晁 関東南画の総帥  
(特別展示室)

空中写真からみる渥美半島の原風  
景 (企画展示室1)  
ひな人形展 (企画展示室2)

常設展示室では渡辺華山の生涯を  
紹介しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中  
心に展示しています。  
赤羽根文化会館展示室でも所蔵品  
を展示しています。

観覧料

企画展

一般 秋 六〇〇円(四八〇円)  
中学生以下 無料  
平常展  
一般 二二〇円(一六〇円)

小中生 一〇〇円(八〇円)

( )内は二十名以上の団体の料金  
毎週月曜日は休館、月曜日が祝日  
の場合は翌日

渥美郷土資料館からのご案内

十月二〇日～十一月十八日

特別展「愛知県美術館平成19年度  
移動美術館 名画への旅 近代  
から現代へ 愛知ゆかりの作家た  
ち」

【赤羽根文化会館でも同時開催】  
二月九日～三月九日

企画展「ひな祭り展」

入館料無料

(財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加でき  
ます。

華山会報 第十九号

平成一九年十月二一日発行  
編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市  
事務局長 山田憲一

千四四一―二四二

愛知県田原市田原町巴江二の二

TEL 五三二・二三一・一七

FAX 五三二・二三一・一七

編集・協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 渡辺巨祥

吉川利明 林 和彦

山田哲夫 別所興一

林 哲志 中村正子

小川金一 柴田雅芳

加藤克己 中神昌秀

増山禎之

華山会報ご希望の方は華山会館・  
田原市博物館にお申し出ください。  
次回発行予定 平成二〇年四月二一日